

## ワカゴイ沢遡行記録

遡行日：平成24年10月6・7日（土・日）

パーティーメンバー

L：河崎 淳一  
平本 三浩  
薄田 健一郎  
R：早川 尚武

10月5日22時30分、早川宅集合、各自の車を置いて出発。関越道小出IC経由にて奥只見湖の銀山平へ向かう。到着は翌6日2時00分。走行280km。駐車場に仮泊用テントを張って就寝。

6日入渓点へ向かう。所要走行距離38km。実は、国道352号線・通称樹海ラインは、昨年の豪雨による土砂災害が発生し、つい先頃まで、復旧工事のために通行止めとなっていた。山行直前でようやく開通したばかりであった。実際通行してみると、そこかしこに被害の生々しい様子が残っていた。

奥只見湖の水位は低く、夏の渇水の影響がまだ強く残っている。この分では、沢も水量が少ないだろうか。車窓の眺めに、そんな事を考えながら入渓点へ向かう。

入渓点付近には、道路脇に数台分の駐車スペースがある。目印に、洋風の1軒屋がある。駐車スペースから、只見川と大白川の合流点へ向かう細い道が付けられている。ぬかるんだその道を通って大白川へ進んだ。

只見川は、やはり水量が少ない。ザブザブと川を渡って、大白川へ入る。合流点の辺りは、倒木が目について少し荒れた感じがした。ゴロゴロとした、普通の川原を黙々と歩く。寝呆けた頭には、まだこれくらいの方が気が楽であります。

大白沢合流点 8：50



50分程進むと、景勝地の様なゴルジュに出た。淵を覗き込むとイワナが沢山泳いでいるのが見える。入り口には、釣り人用のトラロープが掛かってたりする。



しばらくは、何の威圧感も無い穏やかな溪相。景色を楽しみながら、いくつかの湍や小さな滝を越えていく。



二俣 11:00

クrou沢へと分ける二俣には11時到着。現在位置を確認し、シロウ沢へと歩を進める。ここまでは、ゴーロを交えた静かな沢歩きであった。先行者の足跡が残っている。割合とのんびりした出発だったので、まだ姿は見えない。

二俣からの出だしは、岩置の滝。花崗岩のフリクションを楽しみながら越えていく。



進んでいくと、溪は狭まり始め、ゴルジュも少しずつクライムの難度が出てきた。岩は非常にしっかりしているので、カチを拾いながらの通過がなかなか面白い。高さはなく、墜ちればそのまま水の中、なのでフリーでどンドン進んでいった。行く先々は、しばらくこのような感じだった。



ゴルジュの通過 11:30頃



この滝は3段あった。12:05

渓は狭まり、また時折開けながら、次第に核心と言われるゴルジュ帯へと近付いてくる。滝も次々と現れるのでなかなか面白い手応えがある。岩の眺めも目に楽しい。



13:30、ついに本日のメインイベントのゴルジュへと辿り着いた。奥を覗き込むと、岩の隙間から、先行しているパーティーが見えた。わざわざ追い付く必要も無いので、一旦休憩する。見れば、残置スリングが垂れている。

1発目、ザックを担いだままフリーで通過。荷物を背負って紐にぶら下がるのは、ちょっと疲れた。



2発目、ザックを下ろし、ロープを出す。ザックは荷揚げする。落ち口の辺りがちょっと微妙な感じ。ラストで取り付くと、最後のランニングが無くなり、もし落ちたら振られてしまうので、気を遣わされる場所。なんとか無事に通過して、ヘタなところを見せないで済んでちょっとホッとした。



オブザベーション中

ここを過ぎると、後は特に考えるような所はなく、順調に進んでいった。



若干1名、少し悩んでいるトコロ。頑張り青年！オジサン達は行っちゃった・・・。



15:20 行動停止

7日 5:30起床

7:30出発

夜半に少し、雨がパラついた。起きる頃には止んでくれたので一安心。

出発して、すぐにカンテ状の滝。乾いていれば、真ん中を直上しようとしたかも知れないけど、濡れているので、左の灌木帯から巻くように登る。渓は、開けた明るい感じ。滝の形が色々面白く目を惹く。



カンテ状の滝



岩底の滝



ウォータースライダーに興じる平本さん

8:00に二俣通過。ワカゴイ沢へと踏み入れる。ここまで来ると、滝は次第にその落差を増してきた。約20mの大滝は手が付かないので、左岸から灌木帯の中に巻き上がる。出だしの踏み跡はしっかり付いていたけど、途中から茂みの中に消えてしまった。沢床へは、懸垂1回で降り立った。



9:00 再びゴルジュが現れる。ここで先行パーティーの姿が見えた。一息入れて少し距離を取った。

右岸の壁を、ヘツリっぽく越えていくところ。ホールドが細かいので、簡単ではない。ここはさすがの河崎リーダー。巧みに突破していく。

この先もまだ、微妙な登りの所が続いている。花崗岩のフリクションが効いているので、ゴム底が本領を発揮している。そうになると、フェルトは少し難しそう。今回健一郎青年だけがフェルト底だった。頑張れ〜。



ちょっと苦しいかあ〜？

次第に地形は、源頭に近付いてきているようにも見えてきた。でも未だ先は長い。見ると上の方には、まだ高い滝が見えているし。



こ辺りで、ロープを出した所で2回リードした。どう、日頃の行いが悪かったのか、何故か2回とも岩が脆い所に当たってしまった。適当にプロテクションを取りながら登って、少し登ったところで、ルート探しつつ、なんだか妙にぬかるんだ所に取り付いたら、ズルズルと滑り落ちたりした。テンション掛ける程滑った訳でもないのに、気を取り直して別のルートを取る。1ヶ所カムを掛け、テストしたらバチンと外れてしまったりとか。効きが悪そうだな、と思ってはいたけど、他に掛ける所が無かったので仕方がなかったのさ。なんとか掛け直してテストしたら、今度は大丈夫そう。もういいからさっさと登ろう。

そうこうしているうちに、ようやくゴールも間近い感じ。溪も随分幅を縮めてきた。いくつもの小滝を越えていく。そうすると、中には身体がつかえそうなミニチュアのような狭い凹角の滝までお目見得した。



しばらく藪を漕ぐと、程なくして草原に出た。円いおやかな平ヶ岳の稜線である。小雨が降り始めた。山稜の風が、身に浸み込むように冷えている。

秋だった。



その日のうちに下山した。翌日は快晴。見過ごし難きものを見過ごした感がある。心を山の中に残してきてしまった、と言うのが正直なところではある。